

勉強空間としての図書館の成立：明治期の上京遊学者による図書館の利用について

伊東, 達也
九州大学大学院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1462101>

出版情報：飛梅論集. 14, pp.1-17, 2014-03-31. 九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻教育学
コース
バージョン：
権利関係：

勉強空間としての図書館の成立

— 明治期の上京遊学者による図書館の利用について —

伊 東 達 也*

問題の所在

本稿では、近代日本において公共図書館が、読書のためよりも学習のための空間とみなされ、受験勉強に利用されるようになった社会的認識の形成過程を明らかにする。

わが国において図書館に対する政治的評価が高まったのは明治30年代以降であり、図書館数やその利用者数が増加した明治30年代半ばから大正期にかけての時期が、図書館制度の確立期といえるが⁽¹⁾、日本の図書館成立史に関する研究では、これまで、この確立期の図書館政策とその後の文教政策との関わりに着目したものが多く、日露戦争後に展開された地方改良運動と社会教育思想の形成、その影響によって「通俗図書館」として、実質的には昭和20年の終戦まで、その性格や内容が規定されてきた図書館の姿が明らかにされてきた⁽²⁾。しかし図書館の利用状況については、「萌芽期にあった公立書籍館は、わが国資本主義原資蓄積期というきびしい条件のなかで、その芽は萎み、枯れて行った。…自然その門を閉ざし本来の『学校図書館』となってゆくのも故なしとしない」⁽³⁾という評価や、「まだ未発達であった学校図書館、大学図書館の補助的機能を果たしていた」⁽⁴⁾、通俗図書館政策下において「『健全有益ナル図書』を保持し、それを読ませようとした努力は、結局大衆の支持を得られず、学生の図書館と化してしまった」⁽⁵⁾という見解にとどまっており、利用の実態や変化については関心が払われていない。

個々の図書館の職業別利用者統計があらわれるのは明治30年代後半以後であり、帝国図書館等の官立図書館についても館内閲覧者の職業別統計が公表されるのは明治40年度からである。しかし、その中で例外的に大日本教育会書籍館が、明治20年の開館当初から職業別調査を行っており、同館の明治22年8月分の閲覧者統計によると総閲覧者数1083人のうち約8割の851人を学生が占めていたことがわかる⁽⁶⁾。来館者の大部分を学生と称される青少年就学者層が占めていたことは、新聞記事等によれば他の図書館でもみられる現象であり⁽⁷⁾、この後戦前期を通じて続く特徴のひとつとなるが⁽⁸⁾、制度確立期以前の明治20年代において既にこの傾向が明らかであった。

とするならば、近代日本の図書館利用者が学生によって占められ、受験勉強の場として使われるようになったことについては、これまで説かれてきたように確立期以降の公共図書館が「通俗図書

*九州大学大学院博士後期課程

館」として、「国民教化」を目的として形成されてきた結果、大衆の支持を得られず、わずかに学校図書館的なものとして学生のみに使われたという消極的な理由で説明されるものではなく、その原因は明治20年代以前から存在していたと考えられる。

そこで、確立期である明治30年代半ば以前の図書館の利用実態に注目することにより、このような現象が生じる要因となったものの究明を試みる。その頃最も多く利用され他の図書館のモデルとなった官立公開図書館（東京書籍館、東京府書籍館、東京図書館、帝国図書館）と学生の関わりかたや実際の利用の様子が描かれた事例を、当時の新聞・雑誌記事や自伝、文芸作品などの記述の中から摘出し、そこに現れた特徴と変化から、図書館という存在に対する社会的な認識が形づくられていく過程を明らかにする。

この時期の学生による利用が戦前における公共図書館利用のひとつの型をつくったとすれば、彼らの学びの行動のなかでの図書館の使われかたをみることにより、近代日本における公共図書館の社会的機能の形成過程が理解できると考える。

1 上京遊学と図書館

(1) 上京遊学者による図書館の利用

日本における図書館の利用は全国均等に発生したものではなく、ある時期までは、ほとんど東京一都市のみに集中していた。全国の図書館閲覧者数の推移をみても、明治34年以前は、その6割以上を東京市（東京府）内の図書館の閲覧者が占めており、時にはそれが8割近くに達している。また、東京の中での図書館別の閲覧者数の内訳をみると、その大部分が東京書籍館を端緒とする東京府書籍館、東京図書館、帝国図書館という一連の官立公開図書館の利用であることがわかる。明治35年までは、これら官立公開図書館の利用が東京の閲覧者総数の8割以上に及んでいる。すなわち、明治30年代半ばまでの図書館制度草創期においては、図書館を利用するという行為は、ほぼ東京という一都市の中で、官立公開図書館の利用を中心として発生した現象であったといえる。

では、この時期の公共図書館はどのような人々が利用していたのだろうか。明治10年代後半から30年代前半にかけては、青少年の上京遊学が盛んな時期でもあった。「地方の少年秀才が前途青雲の志望を抱て都下に遊学を試みる者、毎年幾萬を以て数ふ」⁽⁹⁾といわれ、東京に居住して就学する青少年の数が急激に増加した。この時期には上京遊学者のためのガイドブックが多数出版されている。代表的なものに『東京遊学案内』（黒川安治編、少年園）があるが、その明治25年版から学校の案内に加えて遊学者が利用できる図書館の案内が掲載されるようになる。学校や下宿、寄宿舎などと並んで東京での遊学に利用できる施設として図書館が認識されている点には、この時期の図書館利用の特徴があらわれている。

先にあげた大日本教育会書籍館の閲覧者統計にもあらわれているように、公共図書館利用者の圧倒的大部分を占めていたのは学生と称される層であり、その多くは、明治10年代後半以降急増した上京遊学者であったと考えられる。図書館の利用統計の「学生」の数は入館の際に本人が申告した

職業区分が反映されるところから、そこに含まれるのは各種の学校の在籍者のみであるが、学校の過年度卒業生や苦学生、各種試験の受験生などは「無職」または「その他」に分類されていたことからすれば⁽¹⁰⁾、実際には統計の数以上に図書館利用者中の学生の比率は高かったと考えられる。

(2) 図書館とはどんな場所か

明治20年代までの新聞記事を見ると、図書館については、蔵書数や入館者数を報じたもの⁽¹¹⁾のほかには、「上野公園の図書館は諸学校休業になりしため近頃縦覧人頗る増加せり」⁽¹²⁾や、「同館は日中と雖も山中に在りて大に風通し宜しければ諸学生は避暑旁々同館に参観する者多し」⁽¹³⁾など、時節の風物として学生が図書館を利用していることを紹介したものが多く、中には書籍館に来ていた女学生が「傘が紛失する下駄がなくなる殊によると弁当の菜までも喰はれてしまふことが有り上草履などハ勝手に履かれてしまふ」⁽¹⁴⁾という被害に遭ったという記事や、「萬世橋外の東京書籍館へ書生風の男が来て英和字彙ヲ借覧したうえ贋造の出入印鑑を出して其の字書を持たまゝ逃げ去つた」⁽¹⁵⁾という、図書館で起きた盗難事件も報じられている。また、「岩手県士族の村山金治（十九年）ハ去る頃より出京して下谷練堀町の英学校に入り学問怠たりなく勉強励み少しにても暇有る折りハ上野の書籍館と昌平館あとの東京書籍館へ行きて広く群籍を涉獵のうち東京書籍館にて度々顔を見合す若い男と物云ひ交し」⁽¹⁶⁾、その男を信用したために金品を騙し盗られたという記事もあり、盗難や詐欺が起こるほど日常的に人が出入りする場所であったことがわかる。

明治28年当時の東京図書館の様子がうかがわれるものに次のような一文がある。

秋の悲しさを知らぬ顔に名も春めける音楽学校の向ひに芝生の土手を左右にして黒渋塗の厳しき門あり、右の柱に掲げたる木札にて東京図書館とは知られたり。…数多の蒼白き勉強家らしき人々、あるは塵だらけなる古びたる本にめげもせず、あるは虫ばみたる記録書の中をこゝかしこ探り、あるはノオトブツクに抜萃するもあり、六尺に余る大いなる窓を十余ヶ所にあけたれどもなほ薄暗き計りにむらがり居る学生紳士、和書漢籍さては蟹の這ふ横文字の洋書に一心にさらしたる眼をば、今しも入り来りし吾躑音に驚かされてか、一斉に吾方にさしむけつ、近眼鏡をかけたる眼、色眼鏡をかけたる眼、ねむげなる、悲しげなる、幾百の眼、皆吾かたにあつまりぬ、やがて二三秒、いつしかに元に復し、しわぶきの音、ペンをけづる響、颯々として金廳落葉を掃ふが如き驚ペンの走る音澁々として錦魚池心に躍るかと思はるゝ洋紙をまくる声折々満室の寂靜を破る書籍出納掛の足音と相和して只時々に入りのみ。但見る黒の羽織に観世捻の紐を結び、藍微塵の糸入縞の袴きたる二十四五の男子の借らんとて借覧用紙に書いつくるは何がしの解剖学、くれがしの薬剤学、最後に書きつけしは、此人千駄木の博士を羨みてにや鉄腸居士の花間鶯なりけり、紺ヘエルの垢染みたる背広を着ながし、綿スコッチの赤糸入茶柄のヅボンを穿てる学生は、その姿にも似もやらで徒然草文段抄、湖月抄などを借らむとするは奥ゆかしけれど規則通り三部借らぬは口惜と思へるにや、新刊の亜細亜なるぞ片腹いたき⁽¹⁷⁾。

満室に近い数の人々が、筆記のペンの音が聞こえるほど静かに読書する場所として描写されており、服装など利用者の風俗もあらわれているが、この中でも学生らしき青年たちが医学書や文学書などを借り出している。東京在住の学生が「学問怠りなく勉め励み」、「群籍を渉獵」⁽¹⁸⁾ するために図書館を利用していたことがわかる。実際に利用した学生の側から図書館の印象を記したものに次のようなものがある。

上野の図書館は、其時分はまだ美術学校の裏の方にあつた。私にとつては、その図書館は忘るべからざるもの、一つである。私は一週に二三度は必ず牛込の山手からてくてくと其処へ出かけて行つた。…私は終日長く本を読んだり空想に耽ったりした。閲覧者は大勢居るけれども、少しでも声を立てると、しつと言はれるので、室内は水を打つたやうに静かで、監視のりをり静かに通つて行くスリツパの音が聞こえるばかりであつた。…私は近松、西鶴をすべて其処で読んだ。「国民之友」に出た蘆花君の翻訳になつた六号活字の外国文学の紹介、それは殊に私には有益であつた⁽¹⁹⁾。[田山花袋「上野の図書館」『東京の三十年』]

田山花袋が東京図書館に通つたのは17歳から20歳までであり、明治21年から24年頃までの回想である。後に作家として大成する素地がこの東京図書館での読書で培われたことがうかがわれ、田山も東京での「遊学」のために図書館を利用していたことがわかるが、ここでも「少しでも声を立てると、しつと言はれる」、「静かに通つて行くスリツパの音が聞こえるばかり」と、読書中は静粛にしなければならなかったことが強調されている。

2 音読・黙読と図書館

(1) 図書館での音読禁止

この図書館での静粛には、館内での音読禁止という図書館独特の利用規則が背景にある。「東京書籍館規則」(明治9年)、「東京府書籍館規則」(明治10年)、「東京図書館規則」(明治13年)ばかりでなく、「大日本教育会書籍館規則」(明治19年)や明治5年設立の書籍館の規則でも、「館内ニ於テ高声雑談不相成者勿論看書中発声誦読スルヲ禁ス」(書籍館書冊借覧人規則)と、音読、雑音の禁止が明確に定められていた。日常生活の中での読書が音読から黙読に変わった時期を明治40年頃とすれば、それ以前の音読が一般的であった時期から、図書館においては音読禁止の徹底、黙読空間の創出ということが行われていたことがわかる。

このことについて永嶺重敏は、音読を容認していた新聞縦覧所が民衆の自発的な設立によつたのに対して、政府主導で設置された図書館は「〈上から〉の公共施設としての性格が強く、そのために、民衆の音読的・共同体的読書の伝統を否定し、それに代わる新しい読書スタイルである黙読をあまりにも早急に、時には罰則をもって人々に強制しようとした」⁽²⁰⁾ としている。たしかに不特定多数の者がひとつの空間に集まって、それぞれに異なる本を読むというような状況は、明治以後の

図書館の出現によって新たに現れたことであり、それまでに存在しなかった特別な場所として、近代的な“private silent reading”を導入した黙読空間が、図書館政策の中で新たに意図的に創出された結果とみることができる。

(2) 音読から黙読への変化

明治20年代以前は、まだ日常の読書は音読によって行われることが主流だったようである。明治10年の新聞の投書に次のような記事がある。

日本の人が在来の書籍を読むのは西洋の様に文法もなくコンマも無くセミコロンも無くフルストップも無く其読声も銘々勝手に奇妙稀代な節をつけウンエエンと…書生の下宿などでは節々夜る人が寝た時分に大声を発して読み他人の安眠を妨げる類は少し心を用ひて貰いたいもの又読書の仕方は真宗の坊さんがお文を読様に句読をして少し早めに読のがい、と思はれます⁽²¹⁾

ここでは音読による読書を自明のものとした上で、周囲に迷惑をかけるような大声での読書がたしなめられており、理想的な読みかたとして「坊さんがお文を読様に」という例があげられている。明治20年頃に名古屋の旅館に宿泊したイギリス人ルイス・ウィングフィールド卿は、「宿泊客が読書をする場合、さらに悪い影響をおよぼす。というのは、いかなる身分の日本人も、鼻にかかった単調な抑揚で声をあげて朗読するものと決めてかかっているので、となりの部屋でそれをながらく聞いていると、呪文にかかったように狂気の寸前まで追いやられるのだ」⁽²²⁾ という感想を残しているが、素読の訓練を経た学生など読書階級ばかりでなく「いかなる身分の日本人も」、日常的に抑揚をつけて音読していたことがわかる。しかし、列車内や待合室など多数の人々が居合わせる公共の空間が増えてくると、そこでの音読は外国人でなくとも迷惑に感じられるようになる。明治31年、内地雑居の実施に際し日常生活や風俗の改善を目的として出版された冊子に、改善すべきことのひとつとして音読の習慣があげられている。

声を張り上げ節を附け面白可笑しく音読せざれば、意味が解からぬと云ふ人がある、随分厄介な人物と思ふが、去りとてその習慣の人は俄かに黙読すれば、必らず居眠りでもするであらうから致方ないが、ソナ人は成る丈人前では止める様にして貰ひたい…ステーションの待合所にて盛んに音読するなどは、其文字を知つての事を吹聴するつもりかの様にも見え、甚だ妙ならぬ次第…新聞などを取り出して呻り始める人は毎度汽車中にある、何分同車中の者は困り切る、中には艶種などを声高々と真面目に読み上げて、吹出させる連中もある…元来日本では例の子曰くから養成された為めか、音読の癖がある…去りながら黙読も音読もツマリ習慣で、何れでも慣れさへすれば宜しからう、決して世間の人に音読を止めるとまでは云はない、可笑い様であるが、音読を好くなら音読し玉へだが、人前では宜しくない⁽²³⁾

ここでもまだ「人前では止める様に」という消極的な勧告にとどまり、黙読は強制されていない。前田愛はこの時代の音読の習慣が民衆の読み書き能力の水準が低かったことに起因していたことを指摘しているが⁽²⁴⁾、「音読せざれば、意味が解からぬ」という人がいたことや、駅の待合所などで音読するのは「其文字を知つてゐる事を吹聴するつもりかの様にも見え」という感想にも表れているように、基本的には学校教育の普及にともなう人々の読書能力が向上してゆき、それに合わせて読書習慣も音読から黙読へと徐々に変化していったと考えられる。

明治42年に出版された『読書力の養成』では、「汽車の中や、電車の中や、停車場の待合室やにて、をりをり新聞、雑誌の類を音読する人あるを見受く。調子のよき詩歌や美文ならともかく、普通の読物を音読するにても、其の人の読書力は推して知るべし」⁽²⁵⁾と、すでに音読をすることが読書能力の低さの表れとみなされていたことがわかる。このことから、人々の読書習慣の主流が黙読に移した時期は明治30年代頃であったと推定される。

(3) 共同の学習室としての黙読空間

では黙読空間としての図書館は、なぜそれより早くから成立したのだろうか。永嶺も比較の対象として取り上げている学校の寄宿舎での黙読、音読禁止の様子と比べてみれば、図書館内での音読禁止は、読書の内容が個別化したことによる集団での読書形態の変化によるところが大きいことがわかる。

明治20年頃の秋田県師範学校寄宿舎では、「夕食後になると黙学時間といふものが二時間課される。此時間中は如何なる事があつても離席は絶対に出来ない、音を出す事は禁ぜられて居るから引出を開けて中から物を出すこともクヤミや咳をする事も出来ない」、「自習時間中一夜二時間づゝは黙学と唱へ、小便にもゆかれぬ沈静厳粛の時間があつた」、「此の黙学時間の厳守こそは秋田師範寄宿舎の誇りであつた」⁽²⁶⁾という「黙学時間」なるものが設けられていた。一方、同じ時期に「其の頃は何でも彼でも無暗矢鱈に暗誦で覚えたもので、幾何の解まで暗誦してゐる人もありました」⁽²⁷⁾という回想もあるところから、学習の方法としては、まだ音読を伴う暗誦も并存していたと考えられる。

多人数が同じ本を読むのではなくそれぞれ異なる本を読み、それを学習行為として同時に同一の空間で行おうとすれば「黙学」とする以外に方法はなく、秋田県師範学校寄宿舎では自習時間をそれに充てることで学習空間を成り立たせている。同じ時期の図書館においても、不特定多数の人々が同一の空間の中でそれぞれ個別に本を読むという行為が、娯楽性を含んだ新聞の解説とは異なり、学習としての読書であったからこそ、「黙学」としての黙読が図書館を利用する人々にも受容され、規則にも自発的に従つたと思われる。

3 もうひとつの読書施設——貸本屋

(1) 学習のための読書と娯楽のための読書

図書館での読書が学習のための読書であったとすれば、上京遊学者の日常生活において、もうひとつ、学習行為としてではなく娯楽のための読書に利用されているものがあつた。貸本屋である。『東京府統計表』によれば、1878（明治10）年の東京府内の貸本屋数は67、1883（明治15）年では66となっており、維新の混乱を経た明治初期の東京においても貸本業が一定の需要を保っていたことがわかる。そのほとんどが、本を背負って得意先廻りをする江戸時代以来の業態であり、典型といえるのが東京牛込で江戸時代から営業を続けていた通称池清こと池田屋清吉であつた。坪内逍遙は池清から聞いた話をもとに当時の貸本屋について次のように記している。

池清なぞは、其頃、父と倅と小僧と都合三人で、今も稀に見る如く、例の山伏の笈のやうな長方形の風呂敷を背負つて、毎日各区を巡つて、貸出しに力めてゐた。池清の営業区域は、神田は連雀町界限まで、本郷は赤門付近まで、次は麴町や四谷といふところであつた。私は一つ橋の東京大学の寄宿舎に居た明治十四五年頃、今の池清主人が、まだチョン髷をば青黛でも塗つてゐるかと思ふやうな青い頭上に載せて、式の如き笈式の包を背負つて、神保町界限の下宿屋を廻つてゐたのを、たしか初めは友人の下宿で知り、次に自分が下宿して知り、とにかく知り合ひになつた。…明治の十三年といふ年が其の繁昌の絶頂であつたといつてよい、と池清の主人は曰ふ。其の頃はわれもわれもと貸本業を始めるといふ風で、東京中に無慮二百五十軒も貸本屋が出来た。…池清の如きも、顧客の激増したので、迎も在来の部数だけでは間に合はず、最も需要の多かつた写本物——其頃は所謂実録物の写本が最も広く飲ばれた——の複製を作るために、写字生を五人ぐらゐも備つておいて、同じ書を七八部通りも謄写させて、貸出したさうな⁽²⁸⁾。

池清に代表される貸本屋が貸出した書物は、明治10年代には、上記の実録物の写本のほかに近世の稗史小説や人情本、軍記物、明治期の戯作などの版本が主流であつたが⁽²⁹⁾、後には活版刷の小説や新刊書なども多く取り扱うようになる。

ところが明治10年代後半になると、「近頃何故か貸本屋の廃業するもの多き由或人の説にては全く自今流行の予約出版の影響成るべしとの事」（『読売新聞』明治17年5月17日）や、「近来兎屋流の書物の安売が流行し殊に小説などは白紙より安い程なれば高い見料を出して読む者はゲツソリ減て稼業に成ぬ故大抵の貸本屋は行立ぬと株を売て転業する者が多い由」（『読売新聞』明治19年4月21日）という新聞記事にみられるように、貸本業が一時的に衰退する状況が生じた。これは記事にもあるように活版刷の小説本が廉価で販売され始めたことの影響が大きい。書籍の活版印刷化と洋紙・洋装化への転換期を明治20年頃とするならば⁽³⁰⁾、変化の時期に際して貸本屋が対応を迫られた結果とも見ることができる。しかし、これで貸本業界が衰退してしまつたのではなく、その後明治20年代になると、それまでになかつた新しい営業形態——顧客を巡回するのではなく店舗を構えて店頭で

貸し出す、貸出目録を配布して注文に応じて配達する等——も現れ、貸本屋の総数も増える⁽³¹⁾。「明十三日より三田功運町にて開業する共益貸本社と云ふは東京府下に滞在の者に限り各人に入用なる書籍を廉価にて貸与ふる社にして社長は綾井武夫氏幹事は片岡善三郎氏にて書物を購ふの資に乏しき書生には最も便利多かるべし」（『読売新聞』明治19年10月12日）というように、貸本業自体は一定の需要を保ちながら存続する。明治20年代に学生に人気のあった雑誌『国民之友』には、東京だけでなく大阪や京都の貸本屋の広告もあらわれる⁽³²⁾。

1862（文久2）年生まれの森鷗外が十代であった明治10年頃にも、学校の寄宿舎で小説や人情本の貸本が盛んに読まれていたことが鷗外の自伝的小説に描かれているが⁽³³⁾、学生を中心とした青少年が日常的に貸本屋を利用して読書することは、その後もずっと続いていたと考えられる。それがあまりに盛んになり過ぎたために、

小説貸本屋の取締 文部大臣の訓示以来各方面に於て学生の取締は一層厳重なるが今又学生の多き神田本郷等の小説貸本屋が猥に下宿屋に入り込み如何はしき図書を貸付け学生の風紀を紊す事尠からざるを以て是等に対し厳重なる取締を設くべしとの議当局者間に盛なりと云ふ⁽³⁴⁾

と、貸本屋が学生の風紀をみだすものとして社会的な注目を集めるようにもなる。明治41年から42年にかけての石川啄木の日記をみると、東京本郷区にあった当時の啄木の下宿には、ほぼ隔日の頻度で貸本屋が出入し、啄木は同時代の文学書の新刊や「如何はしき図書」等まで、数多く借りて読んでいたことがわかる⁽³⁵⁾。

(2) 「物之本」と「(絵)草紙」

江戸時代に広く流通するようになった商品としての本は、大きく「物之本」と「(絵)草紙」の二種類に分かれていた。「物之本」とは、教養書や実用書のことであり、「(絵)草紙」とは、さし絵の入った読み物や物語をさすが、貸本屋ではなく販売を目的とした書店で扱われていたのが「物之本」であった。「本屋」という語は「物之本屋」の略語から生まれたもので、客が店で買い求めるような本こそが「物之本」であったといわれているが⁽³⁶⁾、これに対して「(絵)草紙」というのは、基本的に娯楽や時間つぶしのための読み物であり、そのような読み物は一度読まれれば済むところから、わざわざ買い求められるものでもなく、店頭売りはほとんど行われていなかった。(絵)草紙は貸本屋が版元から仕入れて貸出すことを前提に出版されていたものといえる。

すなわち、読書の種類として教養のための読書と娯楽のための読書があり、それぞれの本は種類や流通経路が異なっていた。書籍の価格が高かったこともあって、娯楽のための本は貸本屋から借りて読むのが一般的で、教養や実用のための本だけを「本屋」（物之本屋）から買う。この「物之本」に対する需要を満たす機能を果たしたのが明治期に新たに出現した図書館であった。樋口一葉が上野の東京図書館に通っていたのは明治24・25年頃であるが、日記によれば、一葉が図書館で読んでいたのは、漢籍や日本の古典文学など「物之本」に属するものばかりであった。また、当時の

東京図書館には、「(絵)草紙」に分類されるような読み物の蔵書はごく少なかったところから、利用者からみた図書館と貸本屋との使い分けは、「物之本」と「(絵)草紙」との違いに、ほぼ対応していたといえるだろう。

明治20年代(明治24年10月)の専修学校の学生が東京図書館に通う傍ら貸本屋からもよく本を借り、その見料を支払っていたという記録⁽³⁷⁾からもわかるように、この時期の上京遊学者にとっては、読みたい本の種類によって図書館と貸本屋を使い分けることが一般的であった。このことからすれば、図書館は貸本屋とは性質の異なる学習や教養の目的のために館内で読書する施設とみなされており、そうであればこそ、まだ一般的ではなかった黙読も図書館の中では実現していたと思われる。

4 受験勉強のための読書空間

(1) 「遊学」から「受験」へ

以上のように、図書館を利用した読書が、読み物などの娯楽を目的とした本ではなく教養書や実用書を、自宅ではなく図書館内で黙読する「学習としての読書」であったことが、学生による図書館利用の特徴であった。そして、上京遊学者を含む学生を中心として、図書館が広く一般に利用されるようになったことにより、図書館という施設そのものが、読書のためというより学習のための場所とみなされることにつながったと考えられる。学習の内容は様々であるが、時期が下るにつれて、学習することの目的が次第に定まってくる。

配達を終へて新聞社から帰ると、冷汁で晚い朝飯を食つて、一寸睡むと、僕は梅干入りの握飯を拵へて貰つて、上野の書籍館に通つた。一は書籍代を儉約し、一は下宿付近の騒々しさを避けて心静かに大学の入学準備を整ふる為である。馴れない昼夜顛倒の仕事に、睡眠時間が如何にしても不足するので、兎もすれば頭がふらふらして、理科の書やユークリッド、トドハンターの上に意気地なく點頭し、一度吾知らず肝を立ててはつと心づけば、満室の青年老年或は哄笑し或は無礼な男と言ひ貌に憤激して居るので、僕は思わず火のように赤面したことがある⁽³⁸⁾。
[徳富蘆花「思ひ出の記」]

明治元年生まれの徳富蘆花の年齢からすると明治22・23年頃の様子であるが、「理科の書」を読むためばかりでなく「下宿付近の騒々しさを避けて心静かに大学の入学準備を整ふる為」という、入学試験に備えた学習を行う目的で図書館に通っていたことがわかる。

この時期の上京遊学は、総体的には近代化という大きな社会変動に起因するもの⁽³⁹⁾であると同時に、個人レベルでの立身出世主義につながるものであり、学生が図書館で学習することも最終的には立身出世、すなわち、職業による富の獲得と社会的上昇移動を目的としていたと考えられる。先に挙げた田山花袋も投稿した当時の青少年向雑誌『穎才新誌』には、「勉強セザレバ幸福ヲ得ル能ハズ故ニ日々学校ニ行キテ能ク勉強セバ賢人トナリテ人ニ用キラレ又官位ニ登ルアリ勉強セザレバ後

ニハ必ズ愚人トナリテ其身ヲ終ルベシ」⁽⁴⁰⁾ というような勉強、すなわち努力を伴う学習による立身出世が盛んに説かれている。

しかし明治10年代までは、その「勉強」や「立身出世」にも具体的な目標がなく、漠然としたものであったともいえる。明治20年代なると、学校制度が整備され、職業資格が学歴と結びつくようになる。1886（明治19）年の諸学校令により帝国大学を頂点とした学校の序列が定まり、さらに翌1887（明治20）年の「文官試験試補及見習規則」の制定により官吏の任用試験の受験資格や試験の免除が特定の学校の卒業という学歴によるようになったことを転機として、これ以後、立身出世の大きな目的が上級学校への進学による学歴の獲得となった。そしてこのことが、図書館での読書を、純粋に各専門分野について学ぶための読書から、学校の入学試験のための準備学習に変えることにつながる。

(2) 「受験勉強」の発生

「入学試験」という言葉が法令に初めて使われるのは明治27年であるが、明治20年代は中学校の卒業生数も少なく、進学を望む学生の絶対数がまだ少ない時期であった⁽⁴¹⁾。試験の内容は後のように入学者を選抜するための試験ではなく、基本的に高等中学校または高等学校等の授業についていけるかどうかの絶対的学力をみるための試験であり、入試倍率も明治28年で1.5倍程度、20年代を通じて高等中学校や高等学校の定員充足率は高くても70%ほどであったといわれている⁽⁴²⁾。

このことは遊学ガイドブックの内容にもあらわれている。『東京遊学案内』に代表される上京遊学者のためのガイドブックには、学校の紹介や附録として入学試験問題の記事はあっても入学試験の準備や受験勉強のしかたについての記事はなかった。その代わりに、東京での下宿の探し方や通学しながらでもできる仕事の紹介に多くのページがさかれている。このことから、「遊学」（故郷を離れ他国に行き学ぶ）の時代には、受験競争よりも東京での学生生活を成り立たせることが大きな課題であったことがわかる。

1892（明治25）年に約16,000人であった中学生の数が10万人を超えたのが1904（明治37）年、中学卒業生が1万人を超えたのが1906（明治39）年である⁽⁴³⁾。いわゆる中学進学ブームのような状況が生じたのが明治30年代から40年代にかけてであり、これに伴って高等学校等の入学試験の倍率が上昇する。「受験」という言葉が学校の入学試験を受験することのみを指すものとして使われるようになったのはこの頃である⁽⁴⁴⁾。

このような変化に合わせて、上京遊学者による図書館の利用も、漠然とした「学習としての読書」から「受験勉強」へと変わっていく。遊学ガイドブックにも、明治20年代には図書館の所在地や入館手続き等の利用案内だけが掲載されていたが、30年代になると次のように積極的に利用を勧める記事が載るようになる。

（第十二 図書館の独学）自活苦学の方法は前に述べた通であるが若し都合があつて学校へ通ふ事が出来ず亦学校へ通つて教師の講義を聞かんでも研究が出来る科目なれば敢へて一定の学校

へ入学しなくとも図書館で読書すれば充分の勉強が出来る尤も一定の学校へ通つても参考書籍を一々購読する事は実際金が懸る故との諸君には図書館の事を説明する必要がある先づ第一最も完成してゐる上野図書館の事を話して置ふ…読まうと思ふ書籍の名を更に書加へて監守員に渡せば直ぐ其書籍を渡してくれるに依つて何処でも明ひて居る机を占領して勉強するのだ⁽⁴⁵⁾

明治30年代になると、それまでの遊学ガイドブックに代わって、青少年向けの総合誌が受験に向けた情報を提供しはじめる。1898（明治31）年に創刊した『中学世界』（博文館）がそれで、「受験案内」というタイトルで学校と入学試験の案内、試験問題、受験参考書、合格体験記などの受験関係情報が毎号掲載されている。また、図書館での勉強を奨励する記事も多くみられるようになり⁽⁴⁶⁾、新聞でも「上野の帝国図書館は毎年六月には最も閲覧者の多いのは通例で是等は皆受験前の学生が参考書を調べに来て居るので六月の閲覧者が二萬千四百余名に達したので明らか」（『報知新聞』明治40年10月1日）のように、毎年入学試験前には学生の図書館利用が増えることが報じられるようになる。

明治30年代の後半に、小説を読むために帝国図書館に入館したある青年が、そこで勉強している受験生の熱気に圧倒されて早々に退散せざるを得なかったという記事があるが⁽⁴⁷⁾、当時の帝国図書館長田中稲城は、このような学生の図書館利用状況に対して「近頃は非常に殖えて四百人も平均這入る様になりました、処が今度はソレは皆学生ぢやと云つて図書館を悪く云ふ、成程確かに大部分は書生には違いない、書生でも悪いことはなからう、ソレだけの来観者があればソレだけの効用があるに違ひないのであります」⁽⁴⁸⁾ という談話を新聞に寄せている。この時期には、図書館側も学生の受験勉強での利用を歓迎するようになっていたことがわかる。

中学卒業生の進学先として人気が高かった高等学校は、大正7年まで全国に8校のままで増設されない。そこで高等学校の入試倍率は急激に上昇し、明治41年には5倍近くになる。また、高等学校だけではなく一部の官立専門学校もこの時期には難関校になっており、明治41年の東京高等商業学校と東京高等工業学校の入試競争率はそれぞれ6.12倍と4.86倍であった。明治39年の『中学世界』に次のような記事がある。

我国の教育は、この十数年間に、長足の進歩をなした、…中学校の生徒数は…今では十幾万に上つて居るだらう。…此十幾万といふ、中等教育を受けた人の中には、直に実業に従事する人もあらうが、其多くは、これから進んで高等の学校へ入学しやうといふ人である。けれども吾国では、残念ながら、此十幾万の学生諸君を、残らず其目的通り、皆高等専門の学校に収容するだけの設備はないから、入学試験の結果、其志望者の過半は不合格として入学を許されず、入るべき学校のないのに困って居る⁽⁴⁹⁾。

中学卒業生数、高等学校志願者数は、明治40年代を過ぎても上がり続け、明治39年には1万人を超え、4年後の43年には1万5千人を超える。そして、これにつれて帝国図書館の入館者数も急増

し、ついに明治40年には年間20万人を突破する。41年に東京市立の日比谷図書館が開館すると、「上野大橋各図書館と同様当館も矢張り学生の占有する処に御座候」⁽⁵⁰⁾と、すぐに帝国図書館と並ぶほどの入館者が集まっている。

幾百と云ふ攻学の士が、余等二人の入来つたのには気も付かず一生懸命書籍に眼を晒らし、亦余念なき風である。それかと思ふと、此方ではノートを出して、せつせと抜粋をやって居るのもあつた。中には同一科目の書籍をば三四冊も取り出して、甲乙比較研究して居るのを見え、半頁ばかり読んでは他の書物を読み、復た一頁程閲ては次の本に替へ、又次の本に移るといふやうに、一心不乱の士もあつた。…見渡したる満堂の学生諸君、凡そ三百人もあつたらうか、実に満員であつた。…欧文の大冊を繙き、つらつらと黙読して居たのも見受けた。何れかの秀才苦学生でゝもあつたであらう⁽⁵¹⁾。

第三図書館使用の件 これは大に奨励する。家などに居ると、無駄な事に駄弁つて受験前の貴重な時を空費し勝ちのものである。夫よりも「君子危きに近よらず」とか、静かな図書館へ行けばどれ丈自分の為になるか分らぬ。予備校の自分の出ない時間なども大いに図書館に入可しである⁽⁵²⁾。

ある日は、出京の最初の日岩木に教へられた上野の図書館へ行ってみた。…自分はその一冊を持って閲覧室へ入った。空席をさがして、本を広げて読みにかかったが、まはりのことばかり気にかかった。ちょいちょい顔をあげて盗むやうな目であたりを見た。みんな脇目もふらず一心不乱に勉強してゐる様子だった。白鉢巻などしてゐるのも何人かゐた。受験生が圧倒的に多いらしかつた。わきに積み重ねてある本や、ひろげてあるノートなどからすると、図書館の本よりは図書館の場所を利用することが目的であるやうに見えた。それにしてもなんといふたかさんの受験生であらう！ 制服の学生なら今の時間はまだ学校にゐる筈だ。あの机に向つてゐる恰好はただ読書を楽しんでゐる者の様でもない。するとどうしても受験生でなければならない。三十を越した法律書生から自分などと同じやうな者まで種々雑多な試験の亡者がここに集まってゐるのだらう。…階段を上つてすぐの、誰の目にもつく所の壁に、小さな字を一ぱいに書き込んだ短冊型の紙が何枚かぶら下がつてゐる。上がつて来たものはちょっと立ち止まってそれを読んで行く。自分が見るとそれは来館者同士がおたがひに問題を提出し合つたり、解答し合つたりしてゐるのだった。…みな真剣になつてゐる。さうして着々と自分の道を歩んでゐる。さういふ感じを自分は受けた⁽⁵³⁾。

以上の例のように、明治40年代以降になると図書館は予備校とならんで学生の受験勉強に欠かさない施設として認識されるようになり、あたかも受験勉強のための道場のような観を呈する場所となるのである。

おわりに

図書館制度草創期にあたる明治20年代の上京遊学者の図書館との関わりについてみると、館内での音読禁止や、娯楽目的の読書の貸本屋利用にあらわれているように、彼らが公共図書館を特に学習目的での読書に利用し始めたことによって、そのような利用形態が定着していったことがわかった。そして、その後も立身出世をめざす青少年の学習のために使われたことから、職業資格が学歴と結びついた後には、公共図書館は入学試験の準備学習のために利用され、明治40年代以降の本格的な「受験」の時代になると、図書館は予備校と並んで学生が受験勉強をするのにふさわしい場所として認識されるに至った。

「上京遊学」が盛んであった時期の東京という都市に始まり、育まれたことが、近代日本の図書館にある特徴を与え、「受験」という文化が生まれたことに伴って、公共図書館の社会的機能が、読書のために本を提供することから学習のための読書空間の提供へ、そして受験勉強のための共同学習室へと変わっていった。

では、学生ではない一般の人々の、図書館という存在についてのイメージは、どのように形成され、どう変化していったのだろうか。利用の実態ではなく、図書館そのものについて語った言説からそれを明らかにすることを今後の課題としたい。

<注>

- (1) 裏田武夫・小川剛「明治大正期公共図書館研究序説」『東京大学教育学部紀要』第8号、1965年。
- (2) 石井敦、1971『日本近代公共図書館史の研究』日本図書館協会。
- (3) 前掲1：p.163。
- (4) 永嶺重敏「明治期の公共図書館と利用者——図書館利用者公衆の形成過程」『図書館界』49巻5号、1998：p.264。
- (5) 前掲2：p.65。
- (6) 「書籍館報告」『大日本教育会雑誌』90号、明治22年9月：pp.711-713。
- (7) 「八月中の大橋図書館」『東京日日新聞』明治37年9月12日。大橋図書館の明治37年8月の閲覧者5848人中、学生が3440人と約6割を占めている。
- (8) 前掲2：p.231。帝国図書館の明治40年度の統計でも閲覧人の約64%が「学生」である。
- (9) 『明治廿四年東京遊学案内』（黒川安治編、少年園、1891年）：p.1。
- (10) 明治40年の帝国図書館利用者の「学生」について次のような新聞記事がある。
此内学生とせるは明らかに学籍にあるもの、みにして高等学校又は判検事弁護士医師試験準備の為め閲覧するものは無職の内に含まる、ものなり（「帝国図書館の近況」『東京朝日新聞』明治40年8月5日）
- (11) 『東京日日新聞』1879（明治12）年6月2日。

此の頃取調べになりたる書籍館に蔵書の数は和漢書及び新刊書七万六千四百九十七冊六百四十帖二百九十九幅四百六十六折六千六百卅枚七百四十九鋪四百卅九軸六百十七種百二十二箇百零七把。交託三千五百零七冊二百七十二種合部数一万五千八百廿三部○洋書一万四千零九十六冊二十五幅八十九枚四鋪三百七十八種。交託八十五冊。合計一万四千六百七十七冊部数六千六百卅部総計十万零五百零廿二冊此部数二万二千四百五十部なりと云ふ

『東京横浜毎日新聞』1884（明治17）年4月5日。

東京図書館に於て去月一日より三十一日迄三十一日間に図書閲覧人数は九千九百六十八人（平均一日三百廿一人強）にして其の内館内借覧の分九千八百四十人館外帯出の分百廿八人とす又貸付せし図書数は四万二千二百六十冊（平均一日千三百六十三冊強）にして其の内館内貸付四万四千四百七十五冊館外帯出七百八十五冊とす此の内和書八千九百九十五冊漢書六千九百十二冊新書二万四千五百八十二冊洋書二千五百七十一冊なり

- (12) 「図書館の繁昌」『読売新聞』1891（明治24）年7月9日。
- (13) 「上野図書館」『読売新聞』1892（明治25）年8月24日。
- (14) 『読売新聞』1878（明治11）年4月14日。
- (15) 『読売新聞』1880（明治13）年5月23日。
- (16) 『読売新聞』1883（明治16）年5月17日。
- (17) 広瀬尾山編『記事論説帝国作文案内』愛智堂、1885年。
- (18) 前掲15。
- (19) 田山花袋「上野の図書館」『東京の三十年』（博文館、1917年）
- (20) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997：p.69。
- (21) 『読売新聞』1877（明治10）年3月13日。
- (22) ヒュー・コータツツイ（中須賀哲朗訳）『維新の港の英人たち』中央公論社、1988：p.395。
- (23) 『でたらめ』大阪毎日新聞社、1898（明治31）年：pp.145-148。
- (24) 前田愛『近代読者の成立』岩波書店（岩波現代文庫）、2001年：pp.170-171。
- (25) 横田章『読書力の養成』広文堂書店、1909（明治42）年、p.1。
- (26) 秋田県師範学校『創立六十年』、1933年：p.279、165、191。
- (27) 前掲26：p.160。
- (28) 坪内逍遙『少年時に観た歌舞伎の追憶』：pp.107-110。
- (29) 浅岡邦雄「明治期『新式貸本屋』と読者たち——共益貸本社を中心に——」『明治期「新式貸本屋」目録の研究』作品社、2010年：p.14。
- (30) 反町茂雄「明治大正六十年間の古書業界」『紙魚の昔がたり明治大正篇』反町茂雄編集、八木書店：p.21。
二十年頃を境として、出版界は急激に洋紙・洋装に一変します。おかれていた文学的作品でも、二十一年には和装のものは殆ど出ません。
- (31) 前掲29：pp.15-21。

- (32) 『国民之友』第7号（民友社、明治20年8月15日）
貸本 国民之友に批評したる書籍は何でも貸外 大坂西区南堀之高等学校向ひ 博書堂
『国民之友』第14号（民友社、明治21年1月20日）
京都貸本 国民之友其他諸新聞雑誌ニ批評シタルト広告スル書籍ハ何デモ一ヶ月貳拾錢ヲ讀
次第 京都新町通竹屋町南 便利堂中村彌二郎
- (33) 森鷗外「キタ・セクスアリス」『鷗外全集』第5巻、岩波書店、1973年。
寄宿舎には貸本屋の出入が許してあつた。僕は貸本屋の常得意であつた。…十四になつた。
日課は相変わらず苦にもならない。暇さへあれば貸本を読む。
- (34) 『読売新聞』明治39年7月13日。
- (35) 『石川啄木日記』石川正雄編、世界評論社、1948年。
明治42年3月13日。貸本屋が来たけれど、六銭の金がなかつた。…14日。貸本屋が来て妙な
本を見せられると、何だか読んでみたくなつた。そして借りてしまつた。一つは「花の朧夜」
一つは「情けの虎の巻」。「朧夜」の方はローマ字で帳面に写して三時間ばかり費やした。
- (36) 清水文吉『本は流れる』日本エディタースクール出版部、1991年：pp.12-13。
- (37) 前田愛「書生の小遣帳」『幻景の明治』（前田愛著作集第四巻）筑摩書房、1989年：
pp.74-75。
- (38) 徳富蘆花『思ひ出の記』民友社、1909年。
- (39) 武石典史『近代東京の私立中学校』ミネルヴァ書房、2012年：p.21。
- (40) 『穎才新誌』明治11年2月23日号。
- (41) 阿部重孝「中学校教育の進歩に関する研究」1929（『阿部重孝著作集第4巻』日本図書セン
ター、1983）。
- (42) 内田紘『明治期学制改革の研究』中央公論事業部、1968。
- (43) 前掲41。
- (44) 竹内洋『立志・苦学・出世——受験生の社会史』講談社、1991：pp.64-66。
- (45) 吉川庄一郎『自立自活東京苦学案内』保成堂、1901（明34）年。
- (46) 「東京独学生」『中学世界』9巻4号、1906（明39）年。
独習者のために尤も便利で、且つ有益なのは、図書館である。図書館は、古今を問はず、和
漢洋のあらゆる図書を備へて、多くの人の閲覧に供えるといふ主旨であるから、閲覧志望の
ものは、女でも男でも、如何なる人でも閲覧できる。
- (47) 「図書館と小説」『東亜の光』1巻1号（明治39年5月）：pp.129-130。
数千の読書子…悶々として或るは時期に後るゝの不安、或は理解完からざるの苦惱、歴々として其額に現はる。…余の傍に座せる二三の焦熱子は申し合はせたるが如く余の顔をチロへ
と眺め、恰も余を以って不勉強となして侮る如き状を示すにあらざや
- (48) 「図書館談（八）田中帝国図書館長」『日本』1902（明治35）年4月8日。
- (49) 「諸学校入学研究」『中学世界』9巻4号、1906（明治39）年。

- (50) 『東洋新報』1909（明治42）年11月18日。
晩秋の東京日比谷図書館 閲覧人の種類は、十人の内六人は学生にて其学生も大部分専門学を研究せんとする者にて中小学生は至つて少なしとの事、尚学生については実業家が三人の割合となり、残り一人は官吏新聞社員と相成る由にて上野大橋各図書館と同様当館も矢張り学生の占有する処に御座候
- (51) 險峰樵夫「上野図書館のぞき」『中学世界』10巻02号1907（明40）年。
- (52) 玄人生『中学世界』23巻07号、1920（大正9）年。
- (53) 島木健作「礎」（『島木健作全集』10巻、国書刊行会、2003年）、1919（大正8）年。

**A study of the library use as a study room
— Focused on the library use of young people who came up to Tokyo
for study in the early Meiji period —**

Tatsuya ITO

The purpose of this paper is to consider the problem why public libraries comes to be regarded as the place for study and it come to be used for studying for examinations, in modern Japan.

The time from the middle of the Meiji30's to the Taisho period can be called the establishment time of the library system in Japan. It turns out that most of the number of library users of the whole country before this time was use of public libraries in Tokyo. Users of these libraries conjectured that the student was main.

It was also prosperous time, to young people's going up to Tokyo for study, from the second half of the Meiji10's to the 20's. Much youth came up to Tokyo from rural areas and the number of the students who reside in Tokyo increased rapidly. From the above thing, it will be considered that students who began to use libraries were young people who came up to Tokyo from rural areas for the beginning of the library system.

Then, paying attention to the life of young people who came up to Tokyo for study before the middle of the Meiji30's, I picked up the example of their actual library use from articles of newspapers ,reports of magazines, an autobiography, a literary work. And I considered the feature and change which appeared there.

As a result, the following was found. When they began to use libraries for the reading purpose of study, such usage gained popularity. Libraries were used for preparation study of an entrance examination by students, and after the Meiji40's, it came to be recognized as a place for studying along with a preparatory school.

Since it was born to Tokyo and was brought up there, the feature of public libraries in modern Japan was given, and the social function of public libraries changed to offer of the reading space for study, and the joint study room for studying for an examination.